

国際的なファッションデザイナーでありながら、経営者としても活躍されている芦田淳氏。自身も建築に造詣が深く美しいものに強く惹かれるという西村清彦副総裁が、その感性の源に迫った。すると、「美」から「ヨーロッパ」まで話が弾んで、日欧比較文化論ともいうべきさまざまなエピソードが飛び出した



日本銀行副総裁

西村清彦

Kiyohiko Nishimura

【にしむら・きよひこ】1953年東京生まれ。1975年東京大学経済学部卒業、1977年同大学大学院経済学研究科修士課程修了。1981年米国ブルッキングス研究所オークンリサーチフェロー、1982年米国イエール大学Ph.D.（経済学博士）取得。1983年東京大学経済学部助教授、1994年同教授、2003年内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官、東京大学大学院経済学研究科教授。2005年日本銀行政策委員会審議委員、2008年日本銀行副総裁。



ファッションデザイナー／株式会社ジュン アシダ社長

芦田 淳

Jun Ashida

【あしだ・じゅん】1930年京都生まれ。1960～1975年高島屋の顧問デザイナーに就任。1963年株式会社ジュン アシダ設立、1964年第1回芦田淳コレクション発表、1966～1976年皇太子妃殿下（現皇后陛下）専任デザイナー、1977年第1回パリコレクション発表、1996年アトランタオリンピック日本選手団公式ユニフォームデザイン。著書に『僕は、ヤングマン。』（文化出版局）、『髭のそり残し』（徳間書店）など。紫綬褒章、旭日中綬章、イタリア共和国功労勲章、カヴァリエーレ・ウフィチアーレ章、フランス共和国国家功労章オフィシエなど受章多数。

「美」を尺度に
自分の生きていく形をつくれれば、
世の中も変わっていく

七〇〇人の幸せなドラマを
毎日演出する仕事

西村 私は学生時代から建築に興味があり、美しいもの、創造的なものに非常に惹かれます。芦田先生のファッションショーを何度か拝見しましたが、これは素晴らしいものだと感じました。五感を揺らされたというか……、ファッションショーはモデルがただ服を着てあるくものだというイメージが覆されたと思います。照明、音楽、モデルさんのステップなど、非常に計算されていますね。

芦田 うれしいお言葉ですね。五〇年近くショーをやっていますが、それぞれが一つの集大成のようなものです。一生懸命つくった服を並べているわけですが、改めて客観的な目で自分を見詰め直しているような面があります。

私は、「毎日が『美』」という世界で過ごしたいと思っています。真・善・美といいますが、私は人間が生きていくうえでは美が一番であると思っています。これは外觀の美だけではなく、精神の美にも通じます。美という尺度で自分の生きていく形を考えれば、戦争

もなくなるでしょうし、醜い行動もなくなるでしょう。

美というのは、身近な毎日の生活から始まります。新人社員には、手洗いをした後は次の人のことを考えて洗面台を拭いておくように言っています。それがまず美の第一歩なのです。そしてあいさつは、相手の目を見てキチンと行う。これもそうです。私は、美の中で死ぬまで過ごしたいのです。

西村 美が行動基準であり、判断基準であり、すべての基準になるというのは、強烈な美意識の現れですね。

芦田 私は自分の仕事について、多くの人の、特に女性ですが、ハッピーのお手伝いをしているという表現をしています。ヴィスコンティ監督の映画を見ると「こういう仕事もよかったな」と思います。いい音楽、いい俳優、いいストーリーにより、人生というものを訴えられますから。でも、私どもの服も一日七〇〇着ぐらい売れています。その七〇〇人のドラマの幸せなときのお役に立っていると考えたと、私の仕事もそう捨てたも

のではないといえます。そして、これから伸びていく若い人たちに、美ほど素晴らしいものはない、美ほど強いものはないということを教えられるということは幸せなことです。

西村 ファッションショーで心がけていることは何ですか。

芦田 完璧主義者ではありませんが、完全に合った音楽、照明、演出によって、ある程度は完全な形でファッションをお見せするようにしています。

もう一つは、国際的なお役に立ちたいということです。物まねではなく日本人がちゃんとしたものをつくっていることを示したいのです。ですから、三〇〇四〇カ国の大使ご夫妻がショーにお見えになっています。

西村 大使のご家族を含めてファッションショーにはバラエティーに富んだ方がいらしていましたね。

「一〇年前の服が今でも斬新だ」
この賛辞こそ勲章

西村 ファッションショーでは、

遠くからでも素材の肌触りがわかるような感じがしましたが……。

芦田 素材はいいものを使っています。残念ながら素材は、日本よりイタリアのほうが良いようです。素材がいいと一〇年は着られます。一〇年前の服を今着ても古くないといわれるのが、私たちの勲章であり、喜びなのです。

仕入れは家内がイタリアに行つて、いろいろなわがままを言いながらやっています。

西村 私は、昨年もイタリアに行きました。ヨーロッパ人は、人と人との付き合いを大事にしますから、なかなか入り込めません。しかし、いったん入り込むと家族同然です。

芦田 私は多くのフランス人とも付き合っていますが、親密になると日本人以上に親しみ深い関係になります。「あなたが大好きだから、キッチンパーティーにお呼びするわ」と招待されたこともあります。日本ではだんだん薄れてきた下町の人情のようなものを、ヨーロッパ人のほうが持っているように感じられるくらいです。

西村 素材の話に戻りますが、モデルさんは素材や作品を引き立てるものだと思います。しかし、それが素晴らしければ素晴らしいほど、モデルさんが輝いてきます。妙なパラドックスを感じます。

芦田 モデルは、パリコレ、ニューヨークと流れて日本に來ます。そんな一流モデルなのですが、みんな若い。私がつくるのは、五〇代、六〇代、ときには七〇代の人を着るような服です。もちろん、二〇代、三〇代が着てもいい服ですが……。それを一〇代のモデルが着るわけですから、孫が着ているようなものです。

ジーパンをはいて汚いTシャツを着たモデルを見ると、「あんなモデルに私の作品を着せたくない」と私は言います。ところが、化粧してぴちっと着こなすと、その子は貴婦人になるのです。ここが凄いいところです。

西村 典型的なウィーンっ子はオペラ座での舞踏会（「Opernball」）などでの社交界デビューといったイニシエーションの儀式を大切にしています。また、アメリカでも



ハイスクールでプロム（「prom」、セミフォーマルなダンスパーティー）があります。そうした緊張感があるから、いつでも貴婦人になれる……。

芦田 ヨーロッパの主な都市には、少し歩けば美術館があります。美しい街の中で美術に触れて育てれば、自然に目も肥えてきます。一方、日本はというと、窓に洗濯物が干されているという都市で、子供たちは育っています。常に自

分の美に対するレンズだけは磨いていたいと思っていますから、これはとても許すことができません。

古くなつて美しくなるのが、本当の美だという感性

西村 ヨーロッパでは、美は細部に宿るといふか、小さなところまで凝っています。そこに職人の意気を感じられます。

芦田 江戸から明治時代までは、日本でもキチンとしたものがありました。古い旅館などを見ると、よくこれだけの仕事をしたものだと感心します。それが、今では多くのことに大ざっぱになってきてしまいました。

西村 アムステルダムを運河沿いに歩くと、まっすぐに立っている建物はほとんどありません。時間が経てば石の建物はゆがみますが、そこによさがあるというのです。イタリア人の友人の住むトスカーナ州ラディコンドリは、一三世紀につくられた街で、真つすぐな建物は一つとしてありませんでした。また、知り合いのアイerland人の哲学者がイタリアに住んでいま

すが、その家は石を組んだうえに大きな木を渡してレンガをおいて建てられていました。そのレンガを修理できる職人がもういないのです。割れたレンガをそのまま大切にしながら生活をしていました。イタリアでは、見るものがみんなゆがんでいましたが、それが非常にきれいに見えました。

ゆがんでいるところに美があるのがイタリアンデザインという感じですね。

芦田 コルシカ生まれの建築家に、私の家の設計を頼んだときの話です。吹き抜けにフレスコ画を描くというのでフランスからアーティストを呼ぶことになりました。六カ月がかりで描き終わったのですが、建築家はその七〇％を削り取るというのです。古い城の崩れた感じを出すためです。だったら、最初からその部分は除いて描けばいいと言うと、建築家もアーティストもそれでは絵全体が死んでしまつて言い張ります。「そんなことを言うあなたは、本当にアーティストですか」とまで言われてけんかしたほどです。確かに、今見る

と壁全体の絵がしのばれる不思議な美しさを漂わせています。

その建築家は、自分たちのつくるものは一〇年、一〇〇年、二〇〇年と時がたてばたつほど美しくなる。日本の建築物はきれいだが古くなると汚れてくる。こう言うので、やりあたりもしましたが、確かにそういう発想はあるようです。

西村 古くなつてから美しくなるものが本当の美しさだという感覚ですね。

**日欧で異なる
美に対する感性と時間軸**

芦田 私はバリにも家を持ったことがあります。これは、「自分で家を持つてフランス人と付き合いなさい。家を持たない日本人はただのエトランゼ（異邦人）」としか思われません」と当時の北原秀雄駐仏大使に言われたからです。古いアパートでしたが、そうしたアパートにはみんなが入りたがっていました。最近の若い人には、不自由さを嫌う傾向もでてきたようですが……。

もともと時間を掛けたことに對して尊重する、それだけの価値を認めるという発想があるようです。

件の建築家は「日本人は時間とおりを尊重するが、フランス人は出来上がりがいいことを評価する」とも言っていました。

西村 時間感覚は確かに違いますね。フランスでは公共機関はほぼ時間どおり来ますが、イタリアはそうでもありません。そのイタリア人が、中南米人に時間を守らないと怒っています。イタリア人は一〇二時間遅れですが、中南米人は一〇二〇時間遅れとスケールが違うというわけです。それはそれとして、美しさに対するあこがれは、日本人より彼らのほうが強いように感じられますね。

芦田 東京も国際都市ですから窓に洗濯物を干すのはやめてもらいたいですね。それから、電線の地中化も進めてほしい。ビル壁面の広告も見苦しいですね。パリから帰ってきて、がっくりくるのはこれらを見たときです。

西村 景観に関する感性は弱いかもしれませんね。そもそも景観条

例などが話題になり始めたのは、ごく最近のことです。

芦田 アンドレ・マルロー(注)がパリの建物の色を決めたという話があります。日本では、赤だ、黄色だ、緑だと、自分のところさえ目立てばいいという感じですね。日本人は今ひどくエゴイステックになっているように思われてなりません。

西村 最近古い写真を見たのですが、江戸城から見た東京は素晴らしくきれいな街でした。緑豊かで建物の高さや傾斜が同じで、調和が取れているのです。愛宕山から見た東京の写真も同様です。明治時代に、ヨーロッパのようにうまく旧市街と新市街に分ければよかったのでしょね。

芦田 江戸時代の日本人は色彩感覚も優れていて洗練されていたと思います。それが、戦争に負けて、アメリカナイズされたこともあるのかもしれませんが、今では色彩感覚がめっちゃめっちゃになってしまいました。

日本で一番素晴らしいと思うのは、食べ物です。誰もが世界中の

食べ物を食べられる国はほかにはありません。これだけ豊かな生活を送っているのですから、ちよつと街にできれば春だ、夏だと四季をしみじみ感じられるような、美しい街にしたいですね。この家も、その家も、この街のどこまでいいでもみんな自分たちのものだという思いで、美しさを維持してほしいと思います。

しおれかった花は外に出す

生涯現役のすすめ

西村 これだけは何いたいと思っていたのが、常に現役であり続けることの大切さと、現役であることを可能にするためにはどうしたらいいかということです。『髭のそり残し』(徳間書店)というエッセイに、しおれかった花を生き返らせるには……。

芦田 外に出す(笑)。

庭に食事ができるテーブルがあるって、その中央に大鍋のような花器があります。あるときそこにしおれかった花を入れたところ、翌日には見違えるように元氣を取

り戻していました。これは少々沈んでいる人間が、再度はつらつと現役復帰する姿に似ていると思います。リタイアすると老け込む人がいますが、自分の花をもう一度咲かせることを考えたらいいのです。人間は生きている限り現役ですから。

ただ、クリエーションの世界は特殊です。ちよつとでも古くなったら、言い換えれば自分が老いたと感じるようになったらリタイアを考えたらいいと思います。でも、私はつくることからは退場したくないですね。

会社の経営のほうは、早く譲りたいと言っているのですが……。面倒なこととはもう他の人に任せて、好きな仕事をキチンとできるように。

私は花を愛していますが、ドライフラワーにするつもりはありません。水分がなくなったら潔く葬ります。これは私が、現役のまま姿を消したいという思いの表れかもしれません。

西村 今日は楽しいお話をありがとうございました。

(注) アンドレ・マルロー フランスの作家、1960～69年文化相